

きつおん  
吃音のある子どもの  
理解と支援



## 吃音とは

吃音とは、ことばがども（吃）ることをいいます。どもる話し方（言語症状）には、以下のものがあります。

- ・音のくり返し（連発）（「そ、そ、そ、それ」）
- ・音の引き伸ばし（伸発）（「そ——れ」）
- ・音のつまり（難発）（「...（つまって声が出ない）...それ」）

難発は、声が出ないので、言語症状だとわからないことがあります。そのため、周囲から、「話を聞いていなかったから、答えられない」、「答えがわからない」などと誤解されることがあります。

吃音のある子どもが、自身の言語症状に気づくのは、年長から小学校低学年の頃が多いようです。自身の言語症状に気づいた子どもは、以下にあげるような心理症状に悩むようになります。

- ・予期不安（以前どもった音や言葉がまたどもるのではないかと不安になる）
- ・苦手な音や言葉、場面を避ける（苦手な言葉を他の言葉に言いかえる、答えが分かっているも「わかりません」と言う、友だちと遊ぶのを避けて1人で過ごすなど）
- ・自尊心の低下（吃音でうまく話せなかったり、発話場面を避けたりする自身を責める）

吃音は、場面や状態により出現状況が変化します。吃音が出やすい場面や状況には以下のようなものがあります。

- ・慌てたり興奮したりしている
- ・過去に失敗したことがある
- ・決まった言葉を使う（固有名詞、挨拶、数字など）
- ・不安や緊張を感じる（大勢の前での発表、苦手な人との会話など）
- ・時間制限がある
- ・周りの人からちゃんとしゃべれ、などと言われる

反対に、吃音が出にくい場面や状況には、以下のようなものがあります。

- ・他の人と一緒に言う
- ・他の言葉に言い換えることが可能
- ・歌を歌う
- ・周りが急かしたりしないで最後まで聞いてくれる。

なお、吃音のある子ども1人1人で、吃音が出やすい、出にくい場面や状況は異なります。そこで、具体的な状況は、子ども本人や担任の先生、保護者に確認する必要があります。

## 吃音についての情報

- ・原因はよく分かっていません。ただ、保護者の育て方の問題から吃音が生じるとする考えは否定されています。
- ・最近、有力視されている吃音の原因論では、吃音が出現する背景に、言語を理解する力と言語で表現する力のアンバランスな状態（言語を理解する力が高く、話したいことがたくさん思い浮かんでいるが、言語で表現する力が十分でないため、思い浮かんでいることをスムーズに言葉にしてあらわせない）があると考えられています。
- ・吃音の悪化には、心理的な学習（どもることを叱責されたりからかわれたりする経験を重ねることで、話そうとすると以前どもった際に感じた恥ずかしさや不安、緊張がよみがえること）や、子どもの性格や言語・知的・運動能力などの要因、周囲の人の接し方などといった様々な要因が複雑に関わっていると考えられています。
- ・吃音のある人は、学齢期以降では、人口の約1%程度いると考えられています。
- ・吃音の予後は、子どもによりさまざまで、大人になっても吃音が残る場合もあります。しかし、その場合でも、学級担任の先生からその時その時に応じた適切な配慮を受けたり、必要に応じてことばの教室や言語聴覚士の先生方から指導・支援を受けることで、進学や就職といったライフイベントを乗り越えたり、毎日の生活を大きな支障なく過ごせるようになったりします。

## 基本的な接し方

- ・ゆっくりと話しかけたり、十分に間をとりながらゆったりと接したりします。
- ・大きな声で話す、ハキハキと元気に話すなど、一般的に望ましいとされる話し方に価値を置きすぎないようにします。
- ・吃音で言葉が出てこない時は、言葉が出るまで待つ。「早く話せ」、「ちゃんと話せ」と注意したり、「どうして話さないんだ」と責めたりしないようにします。
- ・「ゆっくり」、「落ち着いて」、「もう一回言ってごらん」などの言葉かけは、子どもを緊張させ、話しにくくさせるので控えます。
- ・「話し方」ではなく「話している内容」に耳を傾けます。

## からかいへの対応

- ・吃音へのからかいを許さない断固たる態度を示します。
- ・からかう子どもへの対応は、子ども本人の意向を尊重します。また、子ども本人や担任の先生、保護者と十分に相談をした上で慎重に取り扱います。

## 特別な配慮の検討

吃音のある子どもの中には、吃音への特別な配慮をとくに必要としない子どももいます。しかし、子どもの不安や困難が強い場合は、子ども本人や学級担任の先生、保護者と相談しながら、以下にあげるような特別な配慮の実施を検討します。

- ・当番の号令のセリフや全校集会の発表の原稿などの変更を許容します。
- ・当番の号令や丸読みを2人で一緒に言う形式に変更します。
- ・委員会などであまり話さなくてもよい役割を設けるなど、多様な選択肢を設定します。
- ・全校集会の発表などの前に、個別の練習の場を設けます。
- ・全校集会の発表などで、原稿を見ながら話すことを許容します。
- ・全校集会の発表などで、マイクの使用を許容します。
- ・子ども本人の強い希望がある場合は、役割を変更したり、代替の役割を用意したりします。

## クラスのみなさんへ

\*吃音のことをクラスの子も達に説明する時に使用して下さい。なお、使用にあたっては、子どもや保護者と十分に相談して下さい。

私たちは、1人1人お話のしかたも違います。たとえば、おしゃべりが大好きな人もいれば、おしゃべりは苦手という人もいます。早口で話す人もいれば、ゆっくり話す人もいます。大きな声でハキハキと話す人もいれば、小さな声でボソボソと話す人もいます。これらは、1人1人の個性であり、どの話し方が良い、悪いというものではありません。

ところで、私たちの中には、お話する時に、音をくり返したり、伸ばしたり、つまったりしてうまく話せない人もいます。これらの人は、ふざけていたり、言うことを忘れてしまったわけではありません。頭の中には、言いたいことがあるのですが、話そうとすると、喉や口がどうしてもうまく動かないのです。でも、うまくしゃべれないだけで、後は、他の人と一緒です。

このようになる人は、100人に1人ぐらいいると言われています。どうしてなるのかは、よくわかっていません。

### みなさんにおねがいしたいこと

- ・がんばって話しているので、最後までお話を聞きましょう。「早く言って」などと急かしたり、「ちゃんと話して」などと責めたりしたら余計に言いにくくなってしまいます。
- ・からかってはいけません。がんばって話しているのをからかうのはとても失礼なことです。
- ・話し方ではなく、お話の中身をききましょう。くりかえしたり、つまったりしていても、ちゃんと聞けば、何と言っているかわかるはずです。

吃音のあるお子さんが、吃音のために周囲から誤解を受けたり、不安や困難を感じずにすむよう、吃音への理解とご配慮をいただければと思います。よろしく願いいたします。

### 「吃音ポータルサイト」のご案内 <http://www.kitsuon-portal.jp>

金沢大学人間社会研究域学校教育系小林宏明研究室のホームページです。吃音のある子どもへの対応や支援についての情報や「吃音のある子どもたち-あなたは知っていますか-」という動画資料が公開されています。

### 吃音のある子どもの理解と支援

作成・発行 金沢大学人間社会研究域学校教育系 小林宏明

〒920-1192 石川県金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域学校教育

電話 076-264-5513 E-mail [kobah@ed.kanazawa-u.ac.jp](mailto:kobah@ed.kanazawa-u.ac.jp) ホームページ <http://www.kitsuon-portal.jp>